

# 手紙文の中の現場指示的な指示語について

小林 由紀

## 1. はじめに

指示語の用法のうち、現場指示用法は話し手、聞き手の構成する「場」に関わる用法であると言える。一方、文章中での指示語の関心の中心となってきた文脈指示用法は前後のことばによる表現内容と関わりをもち、書き手、読み手の構成する「場」からは独立した用法であると言える。

しかし、文章中の指示語にも書き手、読み手の「今、ここ」に関わると見られる用法があり、これらは、大きく言えば、現場指示の延長上に位置づけることができるであろう。このような文章中の指示語の現場指示的な用法について、本稿では、手紙文をとりあげ、その文章としての性格と関連させながら見ていくこととした。

## 2. 資料

資料としては、小説の中の手紙部分を用いた。実際にやりとりされた書簡集などもあるが、小説の方が状況がわかりやすいであろうこと、手紙の用例集よりは話が複雑でいろいろな指示語が出現すること、などを考えて、小説を用いることにした。

小説の場合、「手紙の書き手」対「手紙の読み手」と「小説の筆者」対「小説の読

者」という二重構造になっているが、とりあえずは手紙文として成立していると考えことにし、手紙文の用例として用いた。各用例後の〔 〕内に作品名を略して示した。

東野圭吾 (2003)『手紙』毎日新聞社

〔手紙〕

東野圭吾 (2012)『ナミヤ雑貨店の奇蹟』角川書店

〔雑貨店〕

湊かなえ (2010)『往復書簡』幻冬舎

「十年後の卒業文集」

〔文集〕

「二十年後の宿題」

〔宿題〕

「十五年後の補習」

〔補習〕

宮本輝 (1982)『錦繡』新潮社

〔錦繡〕

森見登美彦 (2009)『恋文の技術』ポプラ社

〔恋文〕

吉野万里子 (2012)『海岸通りポストカードカフェ』双葉社

〔カフェ〕

## 3. コ系の現場指示的な指示語

以前、随筆中の現場指示的な「この」の用法について、①文章そのもの及びそれに付随するもの、②筆者・読者が共有すると考えられる時空間や状況、③筆者自身の周辺のもの・場所など、の三つに分けたが、手紙文でも基本的な枠組みはそのまま維持できそうである。

- ①手紙そのもの及びそれに付随するもの  
基本的に一人の書き手から一人の読み手に対して書かれる手紙文では、多少時間差が生じるものの、手紙そのものは目の前にあり、書き手にとっても読み手にとっても「今、ここ」にあるモノである。
- (1)のように、意識の上では書き手が「コレ」と言って差し出し、読み手が「コレ」と受け取って理解する、という意味で、書き手・読み手に共有されている、ある種の場にあるモノとみなすことができるだろう。(2)などもその例にあたる。
- (1)〔冒頭〕 竹沢真智子先生、おかげんはいかがですか？ これは、僕からの最後の報告の手紙です。  
〔大場→竹沢先生、宿題〕
- (2)〔冒頭〕 拝啓。  
今、俺は京都駅の近鉄名店街の奥深くにある喫茶「ジェーン」にて、この手紙をしたためている。  
〔守田→小松崎、恋文〕
- (1)も(2)も手紙の冒頭の部分であり、特に先行する部分に言及があるわけではないが、「これ」「この手紙」とコ系の指示語が使われている。
- 手紙に付随するものも同じように考えることができるだろう。次の二つはそのような例である。
- (3) 大塚さんのほうが一枚も二枚も上手でした。大塚さんは本当に偉大な人であると腹の底から分かりました。とうてい私ごときが刃向かえる相手ではありませんでした。それを今、痛感しております。反省しております。京都へ向かって土下座しながら、このお手紙を書いています。この染みは反省の涙の跡です。〔守田→大塚、恋文〕

- (4) それでも、わたしが悦子であることをまだ疑うのなら、わたしとアズしか知らないことを何か聞いてください。例えば。

わたしがアズに送っているこのレターセットのこと。これはアズが二年生の夏休みに家族と北海道旅行をしたときのお土産にくれたのとおなじものだって気付いてた？

〔\*悦子→あずみ、文集〕

- (3)(4)とも、手紙の中では初めて言及されることがらであり、文脈指示とは言えない。(3)では、手紙についた染み、(4)では手紙の紙そのものであるが、どちらも読み手の目の前にあり、どの染みか、どのようなレターセットか、読み手が具体的に理解することができる。

- ②書き手・読み手が共有すると考えられる時空間や状況

これも、書き手と読み手との両方にとっての「今、ここ」である。

手紙を送る状況では、普通、同時代の離れた場所にいるわけだが、その全体を包むような時空間などは、手紙の内容とは別に、書き手と読み手の両方にとって共有され、コで指し示すことができる。

まず、場所を表す例として次のようなものがあった。

- (5) ちなみに、森見さんほどの聖人君子であれば、そんな心配はないと思いますが、万が一、この世界のどこかで伊吹さんとバツタリ出くわして、万が一、ちょっと話がはずんだとしても、くれぐれもそれ以上の接近遭遇はご遠慮願います。〔守田→森見、恋文〕
- (6) プライストレスな青春を実験と勉強

に捧げ尽くすことの尊さについて、最近よく考えます。やはり学生はこうでなくてははいけません。しかし、もし夏季休暇があるのならば、いっそのこと俺も、この大して知りもしない日本社会に早々と見切りをつけて、恋に破れた小松崎君と手に手を取り合い、インドへ行ってしまうのも一興です。

[守田→森見、恋文]

(7)[冒頭] うちの両親は、ぼくを連れて、夜逃げをしようとしています。

ものすごくたくさんのお金があって、それが返せず、会社もつぶれるようです。

今月末に、こっそりとこの町を出ていくつもりです。

[男性相談者→ナミヤ、雑貨店]

(5) から (7) まで、それぞれここで初めて言及されていて、文脈指示とは言えない。書き手と読み手との両方が属する「この世界」であり、「この日本社会」であり「この町」であるので、突然コを用いても理解される。(7)の「この町」については、相談者と読み手が同じ町にいるという例だが、もし、話し手側だけがいる町をさしている場合にはあとに述べる③の例となる。

次に、時の例である。

(8) 「彼女はもともとからぼくのことを気にしていたらしいのです」と君はいう。断じて認めないが、しかし敢えて認めるとして、ならば、この春から夏にかけて、俺が忙しい生活の合間を縫って、夜な夜な君のために書いてきた手紙はどうなる。 [守田→小松崎、恋文]

(9) 兄の心配よりも自分の受験のことを心配してください。この夏休みは大

事です。予備校の授業、あんまり馬鹿にせず真面目に受けるといいと思う。

[守田→妹、恋文]

(8)(9)とも文脈指示ではなく、書き手と読み手の「今」を基準とした時間を表している。(8)は「今」に至る時間であり、(9)は7月28日の手紙なので、「今」を含む前後の時間である。

次に、書き手と読み手が共有する状況の例をあげる。

(10)[冒頭] 前略 元気ですか。

九月だっていうのに毎日暑いな。そっちはどうですか。屋外での仕事が多いとってたから、この炎天下じゃたいへんなだろうな。リサイクルの仕事ってどういうことをするのかよくわからないけど、とにかくがんばってください。

[兄→弟、手紙]

(11)[冒頭] ホームページを拝見しました。閉店の理由は、経営難ということでしょうか。この不景気で、私の家の近所の商店街もぼつぼつと店が閉まっています。

[客→店、カフェ]

(12) こんなふうには書いてみると、彼が元気だった頃のことを思い出せて楽しい気分になります。もしかするとそれがナミヤさんの狙いなのでしょう。いずれにせよ、この往復書簡(という言い方は変かもしれませんが)が、励みになっているのは事実です。

[女性相談者→\*ナミヤ、雑貨店]

(13) 私が教える保証はない、と仰ることでしょう。しかし、そんなことは絶対にない。なぜなら私は清く正しい人間だからです。これまでの人生で嘘を吐いたことは一度もない。その点をどうか、ご理解頂きたい。

この不毛な大人げない争いにけりをつけましょう。〔守田→大塚、恋文〕

(10) から (13) まで、どれも先行する部分には言及がなく、文脈指示とは言えない。(10) については、そっちはどうか、と聞いてはいるものの、「この炎天下じゃたいへんだろうな」と、自分の経験している天候状況を相手が共有しているという感覚のもとに「たいへんだろう」と推測をしていると考えられる。(11) の「不景気」は全体的な状況であり、一般的に手紙の書き手と読み手との両方が共有する状況と言え、書き手が「この不景気」と言えば、読み手はすぐにその具体的な様子を理解することができるだろう。(12) (13) は天候や景気などよりは限られた範囲の、手紙の書き手と読み手の間で共有される状況である。お互いが理解している状況なので、「この往復書簡」「この争い」と言えば、その具体的な内容が手紙の読み手にも理解できるのである。

③ 書き手自身の周辺のもの、場所など  
これは、読み手を含まない書き手の「今、ここ」である。

目の前に相手がいる現場指示では、自分周辺のコ、相手周辺のソがよく用いられるが、手紙文では相手が目の前にいないので、簡単に用いることはできない。しかし、相手が予想しうるモノであれば、使用できるようである。場所が一番わかりやすいが、それ以外にもある。以下三つは場所の例である。

(14)〔冒頭〕 拝啓。

お手紙ありがとうございます。研究室の皆さん、お元気のようにでなにより。

君は相も変わらず不毛な大学生活を

満喫しているとの由、まことに嬉しく思います。

その調子で何の爽りもない学生生活を満喫したまえ。希望を抱くから失望する。大学という不毛の大地を開墾して収穫を得るには、命を懸けた覚悟が必要だ。悪いことは言わんから、寝ておけ、寝ておけ。

俺はとりあえず無病息災だが、それにしてもこの実験所の寂しさはどうか。〔守田→小松崎、恋文〕

(15)〔冒頭〕 元気ですか？ 僕は元気です。危険な目にも遭っていないので、ご安心を。

そして、未だ停電中。

職場の校長に「いつ復旧するのだ？」と訊ねると、「日本人はいつ修理に来てくれるんだ？」ときた。どうやら、自分たちでどうにかしようという気はなさそうだ。電気についてだけではなく、この国の人たちは、海外からのボランティアとはそういうものだと思うているということに、最近少しずつ気付いてきたよ。

この村に赴任する際、参考にと、電子機器隊員の活動記録を事務所でコピーして持ってきていたから、復旧のヒントはないかと読んでみたところ、役場の電気課の男性二人に修理の仕方を教えてあと書いてあった。

〔純一→万里子、補習〕

(16) 静香ちゃんと浩くんはどれくらいわかりあってるのだろう。

そんな話題を悦ちゃんにふっかけられたと浩くんにお伝えください。

わたしの通信手段ですが、一時帰国用のこのマンションにはパソコンを置

いていません。携帯電話は持っていません。できれば手紙で連絡を取らせていただきたいので、差出人名を別名にして(当然、女性の名前で)送らせてもらっていいかしら。

〔\*悦子→静香、文集〕

(14)(15)とも冒頭から特に言及はなく、(16)もここで初めてマンションの話が出てくるので、文脈指示ではない。三つとも書き手のみのいる場所で、読み手は別の場所にいる。(14)(15)は読み手に書き手がどこにいるかの知識がある場合である。(15)の場合は、書き手がどこにいるのかについて読み手は全く知らないが、しかし、どこかには必ずいるわけで、それが、自分のいる場所を突然コで表すことができる理由であろう。

次に、場所以外の例をあげる。

(17) 和蠟燭の店をのぞいたりしたあと、駅前のミスタードーナツに寄った。そこで君からの手紙を読んで笑いこぼせば、店員に不審そうな目で見られてしまった。他人が恋路で煩悶しているのは面白い。君だって自分のことは棚に上げて、他人を嘲笑った経験があるだろう。ないとは言わせませんよアナタ。

流鏝馬神事に三枝さんを誘えなかったのは残念だが、この詩を贈れなかったのは不幸中の幸いである。

〔守田→小松崎、恋文〕

(18) 俺の無能ぶりに業を煮やした谷口さんが不動明王と化し、〔中略〕日々をやり過ごしてきた。そうして、君の見込みなき恋の行方など毛ほども気にならなくなったとき、ようやく手紙が来た。

まずはこのやり場のない怒りをぶち

まけたい。

土日、研究所のみんなで教授に内緒の親睦旅行に出かけたとのこと。研究仲間として仲良くやるのはいいことだ。和気藹藹と金沢旅行も悪くない。

しかし、なぜ金沢まで来ておきながら、俺のところへ姿を見せないのか。金沢まで来たなら七尾まで特急になぜ乗らない！俺も四回生たちに会いたかった。〔守田→小松崎、恋文〕

(17)も(18)もその手紙の中では初めて言及されている。(17)は小松崎が守田への手紙の中で書いてきた詩なので、この手紙の読み手の小松崎にとっては、守田の手元に詩があることも、その詩がどんなものであるかもわかっている。そのような状況で、手紙の書き手の守田は「この詩」というようにコを使って表している。(18)は、書き手の感情で、これは読み手にとっては詳しいことまで予想できるわけではないが、書き手に付随するモノとしては想定の内範囲内であろう。ここでは、後ろに詳しい説明が来ているので、後方指示と紛らわしいが、冷静に「これから後ろに述べるような感情をぶちまけたい」という説明的な表現ではなく、「この今私がつ持っている感情をぶちまけたい」というように理解をしておきたい。

ところで、書き手側をコで表せるなら、読み手側をソで表すこともできるはずである。次の例は書き手側を「こちら」で表している例と、読み手側を「そちら」で表している例である。

(19)〔冒頭〕 拝復。こちらは連日雨続きで雲が低い。海は暗い。実験データをめぐって議論しているうちに俺のいかげんさが露呈し、谷口さんはまた不

機嫌になってきた。

〔守田→小松崎、恋文〕

(20)〔冒頭〕 お元気ですか？

わたしは元気です。

今日、早速、電池やカレーを買いに行きました。食べ物のリクエストが少なかった分、あなたの好きな作家の新作や、そちらでも手に入りそうな材料で作れそうな料理の本を玉手箱に入れてみました。この箱をあなたが開けるのかと思うと、ドキドキします。

〔万里子→純一、補習〕

読み手側をソで表す例はあまり多くないが、書き手側周辺のモノをコで表すということに対応して、読み手側周辺のモノで、書き手がそこにあることを知っていたり、予想できたりするモノであれば、ソで表すことができる。

(21) お預けしたパソコンは、くれぐれも持ち出さないでください。間違っても、研究室へ持って行かないでください。そのパソコンを森見さんがしっかり保管してくださるかぎり、俺は憎むべき相手に一矢報いることができるのです。〔守田→森見、恋文〕

(21) は前にパソコンの話が出ているが、文脈指示ではなく、相手の手元にあるパソコンを「そのパソコン」とソで指し示している例と考えていいと思われる。

この節の最初に述べたように、基本的な枠組みとしては、以前に扱った随筆の場合と同じであるが、手紙の場合、基本的な読み手は一人、読まれる時間も普通はかなり限定されてほぼ同時期とみなしてよいというような文章そのものの性格

の違いがある。

そして、①については物理的なモノが相手に届くだけに付随するものもいろいろと考えられる。②については、随筆では、書き手側のかかなり漠然とした「想定読者」との「場」の共有と言うしかないが、手紙文では読み手が特定されていることが多く、その分共有される状況なども個別的なものに及ぶ。③については、書き手と読み手が個人的な関わりがある分、相手の周辺のことについて予想できる範囲が広く、コを用いやすくなる。また、書き手が読み手側について持っている情報も多いので、読み手側のモノに対してのソも用いやすくなる。

#### 4. ア系の指示語

次に、ア系の指示語について見る。一般に、ア系の指示語は文章の中の表現を前提として使われるわけではないので、文脈指示とは言えないと考える。手紙文の中のア系の指示語を見ると、文章外での書き手と読み手との共通体験などが前提となって使われている。コ系の指示語との対応もある程度考えられるが、書き手、読み手の「今、ここ」から離れるため、個々の用法の境界線はあいまいである。

まず、コ系の①に対応するところから見ていく。「この手紙」に対して、以前に出した手紙についてはア系の指示語が用いられる。

(22) 悩んだ末に書いたのが、あの最初の手紙だったので。ただし私はあの手紙で、本当のことを書きませんでした。内心ではオリンピックから逃げたがっている、ということは隠しました。

〔女性相談者→ナミヤ、雑貨店〕

(23) 前回あんなことを書いたら、君からさっそく相談をもちかけられたので俺はびっくりした。しかもそれが恋の相談だったので、なおさらびっくりした。 [守田→小松崎、恋文]

(22) も (23) も、その手紙の中では初めて言及されているが、「あの手紙」「あんなこと」で読み手には理解される。

コ系の①との対応からは離れるが、相手側から送ってきたものについても、ア系で表す例があった。

(24) [冒頭] 一筆啓上。当方、あの謎の詩の解説に成功した。イブキナツコ。なぜおまえはそんなメッセージを送るのか。おまえは何を掴んでいる？

兄。 [守田→妹、恋文]

(24) の例について、コ系の③のところであげた (17) の「この詩」と対比して考えてみると、受け取ったものが書き手側の「今、ここ」の手元にあるか、あるいは手元にはなくて言っているか、という違いになる。

手元にある「この詩」の場合、物理的なモノが「今、ココ」を支えている。一方、手元がない「あの詩」の場合、書き手の意識からすれば、モノがココにあるかないかの差として感じられるだろうが、ココにないモノは結局のところ、「今」あることも保証されず記憶の中のモノであるとも言える。

この点に関して、次のような例があった。

(25) お分かりですか。私がようやく本気になっているのですよ。こんな機会は二度とない。だからパソコンと実験ノートを返してもらわなくては困るのです。

大塚さんだって、あのパソコンがなければ、修士論文を一から書き直さなくてはならないのではないですか。

[守田→大塚、恋文]

(25) の「あのパソコン」も、この手紙の中では初めて言及されている。その前の点線部の「パソコン」は別の守田のパソコンである。「あのパソコン」の方は大塚のパソコンで、守田が隠している。つまり、(24) の例と同じように、書き手の「今、ここ」にはない、という例である。

(26) とにかく今はそんなことを言っていられないのです。実験を再開しないと！ あのパソコンと実験ノートには、たいへん重要なデータが入っているのです。この荒れ果てた地球を住みやすい星に変え、人類の明るい未来を切り開く素晴らしい実験データの数々が入っている。 [守田→大塚、恋文]

(26) は (25) と同じ手紙の少し前の部分で、「あのパソコン」は守田のパソコンだが、ここで初めて言及されている。読み手側の手元、つまり「今、ここ」にあると予想されれば次の (21) のように「その」が使えると思われるが、ここでは相手側が隠していることが予想され、お互いに共通理解のあるモノとしての「あの」が選択されていると考えられる。

(21) はコ系の③のところであげた例であるが、もう一度あげておく。

(21) お預けしたパソコンは、くれぐれも持ち出さないでください。間違っても、研究室へ持って行かないでください。そのパソコンを森見さんがしっかり保管してくださるかぎり、俺は憎むべき相手に一矢報いることができます。 [守田→森見、恋文]

上で述べたように、(21) の例では、パソコンは書き手が自分で預けたので、読み手の手元にあることはわかっている。実際には読み手がどこか別のところにおいているかもしれないし、あるいは盗まれているかもしれないのだが、書き手の意識からすればパソコンは読み手の手元、つまり相手側の「今、ここ」にあるので「その」が使われていると言える。

ここで、あらためて考えてみると、コ系の③の例になる書き手の周辺にある「このパソコン」に対し、読み手の周辺にあれば「そのパソコン」となり、どちらからも離れていれば「あのパソコン」となる。その限りにおいて、モノの位置でコソアが決まっていると言えなくもない。しかし、一方で、書き手と読み手の両方の目の前にあるわけではないので、読み手が予想できるものでなければコは使いにくいし、逆に書き手が予想できるものでなければソは使えない。アはお互いに了解できるものである必要があるだろう。さらに言えば、ソでさしたモノが本当に読み手の周辺にあるかは保証されないし、アでさしたモノは、そもそも「今」はない過去のモノでもいいわけである。コでは、書き手の「今、ここ」に現にあるモノであっても、「今、ここ」から離れた、ソやアでは、モノと個人的な記憶と一般的な概念との境目はあいまいであると言える。

コ系の③にあたる例が先になったが、コ系の②に対応するものとしては、共通の体験をした場所やできごとなどが考えられる。

(27) 父はことし七十歳になりましたが、まだ矍鑠と毎日会社に顔を出し、

そのうえ、月の半分は東京支社で指揮を取るため、あなたも御存知の、あの青山のマンションで東京住まいをつづけています。〔亜紀→靖明、錦繡〕

(28)〔冒頭〕天城の修養会へ行く前、夏休みに入ったら自殺しようかと思っていました。家がぐちゃぐちゃで、未来なんてない気がして。お母さんも体がつらそうだし、一緒に死ぬのもいいかなと思ってました。でもね、先生はあの滝のそばで言ったでしょ。

〔生徒→先生、カフェ〕

(29) 守田とはいろいろな話をした。

守田はなかなか見どころのあるやつだ。ひねくれているように見せて、素直なところもある。「オオツカさんにも感謝してます」と言っていた。さんざんいじめられて、それでも感謝するところに、あいつの器の大きさを見るね。もうちょっとあいつに優しくしてやったらどうだい？ あんまり意地悪してやるなよ。九月のあれはひどかった。

〔＊谷口→大塚、恋文〕

(27)(28) は場所の例、(29) はできごとの例である。

コ系の③には読み手もよく知っているものと、予想できるものがあったが、ア系にも、書き手と読み手の共通了解を前提とするものと、それを前提としないものがある。後者の例をあげる。

(30) 降っていた雨が上がって、比叡山の方向に虹がかかったのです。「虹だ」という声が出たので、僕は窓の外を見ていました。そのとき目に入ってきたのは、田んぼの畦道を歩いている、母親らしき女性と小さな少年です。そし

てサンダーバードが通り過ぎるとき、少年は赤い風船を飛ばしました。

ほんの一瞬の出来事でしたが、僕は子どもの頃の情熱が戻ってくるのを感じました。子どもの頃にいっしょうけんめい手紙を書いて、風船につけて飛ばしたように、京都に向かって手紙を書いてやったら面白いのじゃないかと僕は思いました。

それが文通武者修行のきっかけです。そうして僕はさんざん手紙を書くことになるわけです。

京都に帰る直前になって、恋路海岸で赤い風船を見つけたとき、僕にはそれがあの琵琶湖畔で少年が飛ばした風船のようにも思えたし、自分が子どもの頃に飛ばした風船のようにも思えたのです。 [守田→伊吹、恋文]

(31) 彼女はやがて私を思い出しました。思い出した途端、由加子の表情には十数年前の少女だった頃と同じ雰囲気を持つ笑顔が浮かびました。デパートの制服を着た由加子は私が想像していたよりもずっと地味な面立ちだったのですが、大きく目を睨んで笑うと、そこにあの幾つかの華やかな風聞を招き寄せていた美貌が甦っていました。

[靖明→亜紀、錦繡]

(29) までのア系の例は、書き手、読み手のどちらからも「今、ここ」でないという例であったが、(30)(31)では、書き手の「今・ここ」でない、ということが優先されている。ただし、多くの場合、文脈から、読み手にも理解できるようになっている。

手紙文は、書き手と読み手の人間関係

があるので、ア系の指示語の用例も随筆などに比べて多いように思われる。一般的な文章は主として文章のことばを中心に理解され、場面からの独立性が高いと言えるが、手紙文は、文章の外側にある知識や経験などを用いて理解される割合が高く、場面への依存度が高いと言える。

## 5. 小説として見た場合

今回、資料として手紙文の出でくる小説を用いたので、手紙文としての指示語とそれを小説として見たときのずれについて少し指摘しておきたい。手紙文の指示語と異なり、小説の中の指示語は、小説の筆者や読者の「今、ここ」に関わるようなものはあまりないと思われるが、そのような小説の中での指示語の使用を考えていく手掛かりになるのではないかと考える。

(32) あなたがなぜ、国際ボランティア隊に参加しようと思ったのか。なぜ、わたしに内緒にしていたのか。そして――。

あなたの決断に、「あの出来事」が影響しているのか。

手紙を書いて気付くことって、本当にいろいろありますね。あれから十五年も経っていたなんて。もう過去の出来事ですよね。 [万里子→純一、補習]

この(32)の例の「あの出来事」はこの手紙の中でも初めて、小説全体としても初めて言及されている箇所である。これを手紙文として見れば、「あの出来事」は書き手と読み手の了解事項であり、読み手はすぐに、ああ、あの出来事かと了解できるはずである。一方、小説として見ると、小説の読者にとっては特定される

べき「あの」が特定できず、欠落感がある。もちろん、ここで「十五年前の出来事」というような表現を用いても、それがどんな出来事であるかが読者にとってわからないことには変わりがない。しかし、「あの」を用いることで、それが小説の登場人物である手紙文の書き手と読み手にとっては十五年も経っているのに、すぐに了解できるような重要で記憶に残る事項であることがわかり、それだけ強く解決されるべき謎として読者に提示されることになる。

(33) だけどがんばってくれ。おれへの手紙なんか、別に書かなくていいからさ。

それにしても直貴には頭が下がるよ。おれがあんなことをしたせいで、大学には行けなくなったと思ってたんだけど、ついにふつうの大学生になってしまったんだからな。

〔兄→弟、手紙〕

この例は手紙文として見ると、「あんなこと」は(32)と同じように書き手と読み手の了解事項であると言える。しかし、小説として見れば、これより前の部分で殺人を犯してしまったことが書かれており、(32)とは異なり、読者にも「あんなこと」が何かは容易に理解できる。ここでは、むしろはっきり表現できない兄の気持ちが表されていると考えられる。このように、小説として見る場合には、全く別の観点も必要になると思われる。

## 6. まとめ

まず、手紙文の中にも、現場指示の延長と見られるコ系があり、①手紙そのもの及びそれに付随するもの②書き手・読

み手が共有すると考えられる時空間や状況③書き手自身の周辺のもの、場所など、の三つに分けて整理できる。また、③については読み手の側のソ系の指示語もある。

また、手紙文の中のア系の用法は、「今、ここ」でないという点では現場指示的なコ系と対比的である。しかし、コ系のようにはっきりと区分はできない。

そして、手紙文の現場指示的な用法は、基本的に一対一のコミュニケーションであるというような手紙文の文章としての性格と深い関係があると言える。

## 参考文献

- 金水敏・田窪行則(1990)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3(日本認知科学会) 講談社
- 金水敏・田窪行則(1992)「日本語指示詞研究史から／へ」『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房
- 坂田雪子(1971)「指示語『コ・ソ・ア』の機能について」『東京外国語大学論集』21
- 堀口和吉(1978)「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8(大阪外国語大学)
- 小林由紀(2005)「指示語の表現性——文章中の『あの』を中心に——」中村明・野村雅昭・佐久間まゆみ・小宮千鶴子編『表現と文体』明治書院
- 小林由紀(2006)「文章中の現場指示的な指示語の用法について——随筆中の『この』を中心に——」『早稲田日本語研究』第15号(早稲田大学日本語学会)
- (慶応義塾大学非常勤講師)